A 日程
（1 月 29 日）

2026（令和8）年度
総合文化学部・地球市民学部
一 般 入 学 試 験 問 題
国　　語
12 時～ 13 時

受験についての注意

試験開始の前に、以下の注意をよく読んでおくこと。

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開かないこと。
2. この冊子の問題本文は **15 ページ、問題は 2 問である**。試験開始後問題を確認し、落丁・乱丁の箇所があるときは手をあげて交換を求めること。
3. 解答用紙は、すべて**ＨＢの黒鉛筆またはＨＢのシャープペンシル**で記入すること。（万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。）
4. 解答用紙は、マーク式解答用紙のみである。試験開始の前に、マーク式解答用紙の定められた位置に氏名及び受験番号をマーク及び記入すること。
5. 解答は、解答用紙の指定された場所にマークすること。余白、裏面には何も書いてはならない。
6. 試験時間中に無断で退場することはできない。
7. 終了の合図があったら、ただちに筆記用具を置き、解答用紙は表を上にして置くこと。この冊子（試験問題）は持ち帰ってよい。

Ⓐ

一

次の文章は、日本語と英語で作品を書いた放浪の詩人「ナナオ サカキ」（榊七夫、一九二三―二〇〇八）について書かれたものである。これを読んで、あとの設問に答えよ。〔60点〕

サカキは鹿児島県薩摩（さつま）郡上東郷村（現在の薩摩川内（せんだい）市）という小さな村で、織物業に関係した大家族の末っ子の七男として生まれ育った。子供の頃からふるさとの自然のなかで歩くことを愛していたといい、それは先祖代々受け継がれた気質であると自身で述べている。太平洋戦争中は一八歳のときに海軍に召集され、鹿児島県出水（いずみ）の海軍航空隊の特攻基地でレーダー部隊に所属し、そこでの体験は後の作品に何度か描かれることになる。原爆を積んで長崎に向かうB-二九爆撃機をレーダーで発見し、その直後に長崎上空の原爆によるキノコ雲を「まのあたり」にした体験が人生の大きな転機となった。

日本の敗戦に際して、サカキは神風特攻隊の生き残りとともに上官から集団自決の命令を受けていたが、昭和天皇の玉音放送によって集団自決を免れる。その後はさまざまな仕事を転々としながら詩人となり、また「ソローのように、日本全国の山や川を調べる非公式の調査官」にもなったという。その後も放浪の旅を重ね、ヒッピーコミューンでは指導的メンバーとなり共同体生活を送るなか、一九六三年に京都でゲーリー・スナイダーやアレン・ギンズバーグなどのアメリカのビート詩人たちと会い、以後、生涯にわたりシンコウを深めた。鹿児島県のトカラ列島にある諏訪（すわ）之瀬島でのコミューンでの共同生活や、日本各地で環太平洋の自然を守る運動を続けるなか、一九六九年以降は繰り返しアメリカに渡り、洞窟やうち捨てられたスクールバスやヒッピーのコミューンなど、各地を転々と放浪しその一生は伝説的となった。詩人としての自らの作品を残しながら、スナイダーの代表作『亀の島』の翻訳者としても知られている。生涯にわたり自然と人間との根源的関係をテーマとした多くの詩を発表し、独自のスタイルで自然保護運動を展開した。そして、死後は遺言により太平洋に散骨され、自ら太平洋を［A］存在となった。

サカキの「数学よ歩け」という詩にある、[1]「一日に　三km、四〇年歩いて人は地球を一周する／一日に　三〇km、三六年歩いて人は月に到着する」（『ココペリ』）という表現からも連想されるように、サカキは毎日多くの距離を歩いた詩人である。サカキの詩は、環太平洋の場所と文化の融合の賜物であり、広大な土地をサカキが歩くことによって詩がうまれた。サカキの英語詩集『鏡割るべし』の序文としてスナイダーが書いたサカキの紹介文では、サカキの半生と詩の特質を「足でかかれた詩」として、次のように述べている。

彼の詩は手や頭でかかれたものではなく、[2]足でもってかかれたものである。これらの詩は坐禅から生まれ、歩くことから生まれ、生きるために生きた命の足跡として残されたものであり、知性や文化のために生まれたものではない。それから生まれた知性は深く、その文化は深遠である。この種の知性と文化はまさに中国や日本の人々が何千年にもわたって、学ぶことと文化の真の意味として理解してきたものである。ナナオ・サカキの独立性にもかかわらず、彼はその携帯用具一式の中に荘子、謝霊運、臨済、役行者、西行、一休、芭蕉、良寛、一茶という縁を携えている。

（「歩いて生まれる」より）

中国や日本には、歩くことで生まれる思想や文学の伝統があり、それは近代以降の思想・文学にもその伝統は受け継がれた。引用文で最初に名前のある荘子（紀元前三六九年頃―紀元前二八六年頃）とは、あるがままの「無為自然」を基本とし、人為を忌み嫌った古代中国の思想家。謝霊運（三八五―四三三）は「山水詩」の祖とされる古代中国の詩人。臨済（生年不詳―八六七）は禅仏教の臨済宗の開祖である中国の禅僧。役行者（役小角、六三四―七〇一）は修験道の開祖とされる飛鳥時代の日本人。西行は［X］。良寛（一七五八―一八三一）は曹洞宗の禅僧でもあった歌人。松尾芭蕉（一六四四―一六九四）は『奥の細道』で知られる俳人。小林一茶（一七六三―一八二八）は、［Y］。また、この伝統に

連なる人物として、大正・昭和の俳人で、Z 種田山頭火（一八八二―一九四〇）なども名前を加えても良いだろう。

ここに名前の挙がった人物の多くが仏教と関連が深く、また人生において多く歩いた先人たちが含まれている。サカキが歩くことにこだわった一因はそこにあるものと考えられる。歩くことは仏教修行の中心的な位置をしめており、昔の修行僧は道を求めて各地の寺を渡り歩いた。本気で道を求めるものは、一カ所にとどまることなく、各地を歩き、重ねていく雲、流れる水となった。これが「雲水」であり、歩く行為自体も重要な意味をもつという。サカキ自身は、浄土宗の家庭に生まれ育ったが、形式的な仏教や政治権力と密接な関係があった仏教には関心が無かった。サカキが関心を抱いていたのは、臨済宗の開祖、臨済であり、臨済が農夫の出身で「インテリ」ではなかった点と、日々の実践によって得られる「悟りの境地」を目指す点において共感を示している。サカキにとっては歩くことが禅仏教にも共通する人生の実践であった。

（中略）

サカキがアメリカにおける「環太平洋文化」について中国や日本の詩と等しくとくに関心を寄せたのは、スナイダーと同様にネイティブ・アメリカンの価値観や伝統であった。サカキの詩集『犬も歩けば』には、「アメリカインディアンの詩人たち」という章があり、モホーク族の詩人、ピーター・ブルー・クラウドとプエブロ族の詩人サイモン・オーティーズの詩の原文とサカキによる日本語訳が掲載されている。ここではネイティブ・アメリカンの詩人と日本からの訪問者サカキとの交流と絆（きずな）が描かれているが、オーティーズの詩には「氷河期／北東アジア／あの記憶すべき／共通の起源／僕は　信じるとも」という記述がある。これはベーリング海峡が陸橋だったおよそ一万年前から二万年前の氷河期に、ネイティブ・アメリカンの先祖が陸地化したベーリング海峡（ベーリンジア）を渡りアメリカ大陸にやっ

て来たとする学説を示唆したものである。この詩からは、サカキとネイティブ・アメリカンの詩人たちとが、B のような存在として親しく接していた様子がわかる。

広大な土地を歩いたネイティブ・アメリカンの中でも、サカキが繰り返し用いたのは、ネイティブ・アメリカンの複数の部族に共通してみられる精霊で豊穣（ほうじょう）の神とされる「ココペリ」[3]のイメージである。それは詩集の中にサカキ自身によるイラストが挿入され、「ココペリ」は詩や詩集のタイトルとして繰り返し登場する。妖精であるココペリは、触角のある昆虫で、笛を手にし、背中に背負った荷物には種が入っている。ココペリは歩きながら荷物のなかに詰まった種を蒔（ま）いていくが、その中には歌の種が入っていると考えられ、このようなイメージに自らの存在を重ね合わせているという。

このように、異なる文化にも共通する価値観を見いだすこと、すなわち、禅僧とココペリに共通する、歩くことについて積極的な意味を見いだす存在を通じて、古代から受け継がれた文化のなかから新たな価値観を創生しようとしたのである。

（塩田弘「環太平洋の地図を紡ぐ「足あと」―ナナオ サカキと文学的伝統」より）

（注）○特攻基地――特別攻撃隊の軍用基地。爆薬を積んだ航空機や魚雷・ボート等に兵士が乗り組み、敵艦隊に体当たり攻撃する特攻作戦は、第二次大戦末期に実行され、陸海軍あわせて六千人余りが犠牲となった。

○ソロー――十九世紀のアメリカの思想家・作家ヘンリー・ディヴィッド・ソロー。各地を旅し、森で暮らし、自然環境に関する多くの著作を残した。

○ヒッピー――一九六〇年代、平和・自由・愛などをモットーとし、既成の価値観に反抗した若者たちを指し、アメリカを中心に世界中に広がった。コミューンと呼ばれる自給自足のコミュニティを作ることもあった。

○ビート詩人――一九五〇～六〇年代にアメリカで活躍したビート・ジェネレーションと呼ばれる文学グループのこと。近代主義を否定、東洋思想やスピリチュアリズムに関心が深く、ヒッピーたちから熱い支持を受けた。

○雲水――修行僧のこと。

問1 二重傍線部「シンコウ」の漢字として正しいものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

① 深厚　② 振興　③ 親交　④ 信仰　⑤ 深耕

問2 空欄 A に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

① 汚す　② 漂う　③ 泳ぐ　④ 支配する　⑤ 変える

問3 傍線部1「一日に　三km、四〇年歩いて人は地球を一周する／一日に　三〇km、三六年歩いて人は月に到着する」というサカキの詩の一節を解説したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

① 宇宙・地球に関する正確な知識と科学的な人間把握により、人間の果たすべき役割を明確化している。

② 地球を超え宇宙へ届く壮大な構図を用い、人間の小ささを乗り越え飛翔（ひしょう）したいと願う心が描かれている。

③ 何もかもが数値に置き換えられ、数字が一人歩きしてしまう地上の人間社会の生きづらさが暗示されている。

④ 具体的な数字によって人間を地球・宇宙に位置づけ、人間もまた自然環境の一員であることを示唆している。

⑤ 地球や月と比べて、ひとりの人間が一生のあいだに歩みうる距離と時間の矮小（わいしょう）さへの嘆きが込められている。

問4 傍線部2「足でもってかかれた」とはどういう意味か。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

① 中国・日本の古典文化を深く学び、自分自身の足のようにその知識を使いこなして書かれたという意味。
② 中国・日本の偉人たちが伝えてきた仏教、特に禅宗の教えへの篤(あつ)い信仰に基づいて書かれたという意味。
③ 一箇所に留まらず各地を放浪し、一つの形へと収まることのない深い知性によって書かれたという意味。
④ 旅によってさまざまな出会いと別れを繰り返し、命と自然のはかなさを意識しつつ書かれたという意味。
⑤ 中国・日本の文化人たちの足跡をなぞるように詩作の修行を続けてきた努力の上に書かれたという意味。

問5 空欄 X 、 Y 、 Z に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑥の中からそれぞれ一つずつ選んで、その番号をマークせよ。

① 旅の中で多くの和歌を詠んだ出家した歌人
② 写生という方法で近代俳句の基礎を作った
③ 出家して隠遁し、和歌や「徒然草」などを残した
④ 親しみのある小動物などを題材とした俳人
⑤ 放浪し「自由律俳句」を詠んだ
⑥ 俳諧師として名をなし、多くの浮世草子を書いた

問6　空欄 B に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

① 彼方からやってきた旅人　② 共通する先祖を持つ親族
③ はかない命を繋ぐ地球人　④ 偶然の出会いを祝う異族
⑤ 愛と平和を求める放浪者

問7　傍線部3「ココペリ」と東洋の禅僧との類似性を説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

① 俗世間から離れ、きびしい自然環境の中で放浪し、自らを顧みつつ詩作する点で両者は共通している。
② ネイティブ・アメリカンの文化は中国・日本の影響を受けており、ココペリの原型も実は禅僧だといえる。
③ 雲や水のように一箇所に留まらず、歩いては新たな教えを得、詩歌の種をこぼす点で両者は共通している。
④ 自然の中を歩き、地球と一体化するような感覚の中で、豊かな実りをひたすら祈るという共通点がある。
⑤ 笛を吹いて詩歌の種を蒔きつつ各地を歩き回り、豊作や幸運を各地に運ぶという点で両者は類似している。

問8　次のa～fについて、右の文章の内容と合致するものには①を、合致しないものには②をマークせよ。

a 長崎の原爆を目撃したことで深い心の傷を負ったサカキにとって、アメリカは受け入れ難い存在だった。
b 敗戦で自決を迫られ、九死に一生を得た体験は、その後のサカキの詩作品に色濃い影を落としている。
c ビート詩人たちとの出会いによって初めて、歩くことがサカキの詩作にとって重要な営みとなった。
d 太平洋を超え地球規模で思考するサカキは、自然と人間との根源的関係をテーマに多くの作品を書いた。
e アメリカのヒッピー文化の影響を受けたサカキの作風は、日本文芸の伝統とかけ離れた自由度を持つ。
f サカキの文学は独特でありながら、歩き移動する修行僧のごとき東洋文芸の流れの中に連なってもいる。

二

次の文章は清岡卓行（たかゆき）の小説『土を選べるか』の一部である。これを読んで、あとの設問に答えよ。〔40点〕

十代末ごろから二十代半ばごろにかけて私は、自分の墓はいったいどこにあるのだろうという思いにときたま捉えられた。性急な答えを求めるものではなかったが、そのころ親しかった友だちのだれかに、もしそんな胸の中の状態を打ち明けたとしたら、こいつはずいぶん奇妙な不安におかされているようだなと笑われ、そんなことどうだっていいじゃないかと言われたかもしれない。

そのころは、「人間到ル處青山有リ（じんかんいたところせいざんあり）」という漢詩の一句が、若い人たちの会話のなかで引用されても、――その底に潜ませている具体的な意味はいつも同じものとはかぎらなかったが、別におかしく響くことはない世の中の雰囲気であった。十五年戦争の後半の時期であったことも深くかかわっていただろう。断るまでもあるまいが、「青山」という言葉はこの場合墓をつくる場所を意味している。

しかし、私にとって自分の墓はいったいどこにあるのだろうという問いは、そのころの私に底流していたある真剣な悩みを、端的にかたどってくれる一つのいわば定かならぬイメージ、それも詩的な高まりを同時に感じさせてくれることもあるイメージであった。

この真剣な悩みとは、私が自分の内部に向けた批判と愛着、そして、自分の外部である幾層もの環境に向けた批判と愛着、それらが深く嚙（か）み合って、やがては避けがたくあらわなものとなる根底的な矛盾を孕（はら）んでいるものであった。そして、その矛盾のすっきりとした解決は、とにかく今は困難というより、もしかしたらいつまでも不可能ではないかと感じさせるものであった。

たとえば、私は十八歳の秋の初めに、自分が生まれ育った大連から遊学のため東京へ単身で向かったが、出発した日の夜、黄海を行く大阪商船の汽船のデッキにひとり立ち、空と海を眺めながら、いつやってくるかわからない自分

の墓を思い浮かべた。そして、そのときの心の形を、二年ほど経(た)ってから文語で詩に書いている。「商船の夜」と題したその詩の最後の部分となる八行はこうである。

幻の島は消え果て
かなた
底ひなき闇のかなたに
われを惑はしむる怪鳥のしば鳴けり
ちちははよ
不孝の子を宥(ゆる)したまへ
美よ
わが墳墓の土くれよ

それは学校が旧制のころの話であるが、私はこの海の旅に先立つ春に大連第一中学校を卒業し、たまたま新設された旅順高等学校文科の英語を第一外国語とするクラスに入学した。しかし、夏休みになって退学した。というのは、入学一年ほど前から翻訳でアルチュール・ランボーなどフランスの詩人たちに熱中しはじめた状態がますます激しくなっており、この学校ではフランス語を学ぶことができなかったので、思いきって東京に行き、第一高等学校文科のフランス語を第一外国語とするクラスに入りたくなったのである。

この身勝手な願望を両親はおおらかにすぐ受け入れてくれたが、私の胸のなかに痛みがなかったわけではない。というのは、両親により多くの経済的な負担をもたらし、また、来年の受験に成功するかどうかはわからず、精神的に

も余計な不安をあたえることになったからだ。そういう意味で私には「［　A　］」という密（ひそ）かな思いがあった。

それに、母には私の予想しなかった惨めな思いもさせていた。この夏休み中の八月のある暑い日に、彼女は汽車に乗って旅順高等学校まで出かけ、あらかじめ電話で連絡がとれていた教頭の先生に、私の退学願の書面を出して、平謝りに謝ってきたのである。私の所業は学校に対してだけでなく、そのため入学の機会を失ったことになる一人の受験生に対しても、わがままな迷惑をかけるものであった。退学を決意したとき、まだ世間をろくに知らない青二才の私はそうしたことにまったく気がついていなかった。

引用した詩の部分の最初に現われる「幻の島」とは、そのころの私が自分なりの美を求めようとした詩作において、好ましく思われた作品の構図である。

詩を書くことに憑（つ）かれはじめていた私は、知情意にわたって自分をとにかくもしばらくは満たしてくれそうな、あるいは酔わしてくれそうな、なんらかの美のイメージをこそいろいろと探っていた。そのための一つの「幻の島」が汽船のデッキから眺める深い夜の空と海の光景のなかで、大連にいたときと同じように、またしても消え失（う）せたというわけである。

私の求めるこのような美は、常識における美と醜のどちらをも含み、しかもそれらを超える高次の美にまで達していなければならなかった。このような美はまた、個人的な狭小の道を通じてであっても、それもまだ可能性においてだけであっても、真と善のどちらにも必然的に、そして真摯に結びつくものでなければならなかった。

つまり、未来におけるどのような自分の弱味を無意識的に予感するとしても、少なくともそのときは自分の人生のすべての目的を意識的に収束することができる一つの魅惑が欲しかったのである。いいかえれば、具体的な人生の最終の到達点としての「墳墓」にかたどらせたかったものは、そのときすべてを統合できるいわばこよなく 2 形而上的（けいじじょう）な美そのもののほかにはなかった。

ところで、私はそのとき、なぜか「わが墳墓よ」と高らかに言いきる呼びかけの形を選ぶことができず、「わが墳墓の土くれよ」とわざわざ視線をあらためてその場所の「土くれ」に注いでいる。これはどうしてか。それはたぶん、私がこよなく崇めた「美」に客観的に厳然と対立している自然や社会に、無意識的に微かながらも怖れをもって触れたしるしではなかったかと思われる。

そうした事情の生生しい延長が見られるのは、この詩を書いた数か月後の冬休みに、東京の第一高等学校の寮から大連の両親の家に帰省した私が、やはり文語で書いた詩、それも単純に「土」と題した詩のなかにおいてであった。

この作品の内容は、二十歳になっている私が、東京で学級や寮室の友だちとたまに町に出て酒を飲むことを覚えたため、当時の日本の植民地の一つである関東州の大連の冬にあって、日本人の酒場にいわば気紛れにしかもひとりで飲みに出かけ、賑やかにしている男女のコロン（植民者）たちや店内装飾などの生臭く猥雑な雰囲気にどうしようもない異和感を覚えて、寒い街路を家に向かうといった事実をモデルにしている。

ところで、その情景の後半にはことさら強調されている事情がある。

酒場で私の周りにいる男女はたぶんみな日本で生まれ、はるばるとこの外地にやってきて働いているように見えるが、まだ世間知らずの高校生である私だけは、祖国は同じでもこの外地で生まれ育っており、いまなにをしているかといえば、両親から学資をもらっているのをいいことに、社会の実生活からは遠く離れた感じの孤独のなかに棲んで、第二次世界大戦中であるそのころの世の中の風潮においては、口に出すのも恥ずかしいような地球の裏側の外国語を学び、ついで、あまりにも生きたいためにかえって現実すべての俗悪さにどこまでも苛立ち、せめておのれの俗悪さを絶つために、あるいは、世界そのものを拒むために、純潔を求める道として密かに自死まで夢みている。――そのような精神の内部における矛盾。

そして同時に、いま述べた年少の詩情につらぬかれたものに並べてことさらに強調されているまた別の事情がある。

自分の特殊な境遇にかかわりながらも、このようにひたすら未来を夢みるとき、やがて遥かかなたに浮かび上がってくる精神的な終焉の空間、いいかえれば美しく生きようとするせつなさが求めた［B］の象徴としての墓は、それを実在させようとするかぎり、地球の上のどこかの土を選ばなければならないが、問題は出発点の方へ逆戻りするかのように、私には選ぶべき二つの候補、すなわち、両親の故郷である日本の高知県の土と自分が生まれ育って深く親しんできた大連の土があるということになり、どちらにも惹かれる私は、これら二つによって引き裂かれるような感じのなかで、どちらとも決められない。――そのような肉体の生い立ちからくる矛盾。

いってみれば、これら二通りの矛盾が不可避的に奥深く嚙み合ったまま、私の二十歳は動きがとれないようなぐあいになりはじめていた。

（注）○人間到ル處青山有リ――「世の中にはどこにでも墓地がある」という意味。
○十五年戦争――一九三一年の満州事変から、一九三七年からの日中戦争、一九四一年からの太平洋戦争、一九四五年の日本の敗戦までの足かけ十五年に及ぶ戦争。
○大連・旅順――中国の遼東半島の港湾都市。一八九八年からロシアの租借地で、日露戦争後から日本の租借地になり、第二次世界大戦での日本の敗北によって中国に返還された。大連港は商業港であり、旅順港は軍港であった。
○黄海――遼東半島と山東半島と朝鮮半島に挟まれた海洋。
○底ひなき――きわめて深い。
○しば――しきりに。
○関東州――遼東半島にあった日本の租借地の呼称。

問1 傍線部1「遊学」のここでの意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

① 外国の学校に行くこと
② 気楽な心持ちで学ぶこと
③ 遊びもし、勉強もすること
④ 故郷を出て、他の土地で学ぶこと
⑤ 勉強をしないで、遊び暮らすこと

問2 空欄 A に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

① 幻の島　② 底ひなき闇　③ われを惑はしむる怪鳥　④ 不孝の子　⑤ 墳墓の土くれ

問3 傍線部2「形而上的な」の言い換えとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

① 意識的な　② 無意識的な　③ 感覚的な　④ 具体的な　⑤ 抽象的な

問4 空欄 B に入れるのに最も適切な本文中の言葉を、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

① 孤独　② 終焉　③ 純潔　④ 精神　⑤ 俗悪

問5 二重傍線部「そのころの私に底流していたある真剣な悩み」の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

① 自分の内部に向けた批判と愛着
② 自分の外部に向けた批判と愛着
③ 精神の内部における矛盾
④ 肉体の生い立ちからくる矛盾
⑤ 精神の内部における矛盾と肉体の生い立ちからくる矛盾

問6 右の文章において、「私」は「墳墓」をどういうものとして考えているか。「私」の考えに合致しないものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

① 人生の最終の到達点
② 精神的な終焉の空間
③ 美をかたどっていてほしいもの
④ 人生のすべての目的を意識的に収束することができる場
⑤ 自然や社会に、無意識的に微かながらも怖れをもって触れたしるし

問7 右の文章の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

① 「私」は、詩人になるために旅順高等学校を退学し、第一高等学校を受験した。

② 「私」は、自分の墓のあるべき所を自分の生誕地と両親の出身地とで決めかねている。

③ 「私」は、大連から日本へ向かう汽船の中で「わが墳墓の土くれよ」で終わる詩を書いた。

④ 「私」は、フランス語を学びたくて旅順高等学校に入学したが、フランス語を第一外国語とするクラスに入れなかった。

⑤ 「私」は、英米との戦争中、フランス語を学ぶことは許容されていた風潮の中で、フランス語を学ぶことをたいへん恥ずかしく思っていた。